

『師の教え』

理事 松村秀一

学年と謙虚さ

長年にわたり、大学内で色々な学生と接してきたが、学年が上がるにしたがって謙虚さが増してくるのが面白い。もちろん例外はあるものの、大半の学生はそうだと思う。

入試に合格して間もない1年生の頃に「知らないことはない」という風に、目が上についていたような学生が、4年生になって卒業論文の指導を受けるべく所属の研究室を決める頃になると、「何も知りませんので」という体で肩をすぼめていたりする。さらに大学院に進学すると、大学外にまで広がる研究者の世界に足を踏み入れ、名前しか知らなかったような他大学の偉い先生に、学会発表の場で答えに詰まるような質問をされたりするものだから、一層控え目になってくる。そして、修士課程だけで終わらず、博士課程にまで進んだりすると、特に論文提出の前などには、「もう少し自信を持って」とアドバイスしたくなるくらいに謙虚さも極まった状態になる。



ドラフト前に鼻っ柱の強そうだった学生野球のスター選手が、プロ入り何年目かで一軍に上がってきたりすると、見違えるほど謙虚になっていることがあるが、あの感じである。こういう状態について「あいつも漸く世間のことがわかってきたな」というように受け取り微笑む大人たちもいるのだが、私としては元々の謙虚でなかった頃の若々しい気持ちをどこかに保っていてほしいと思うのである。

私の場合

かく言う私も、学生時代にはほぼ同様の経過を辿った。1、2年生の頃は、生意気な我が物顔でキャンパスを闊歩していたように思う。すぐ上の3、4年生の先輩には深々と頭を垂れていたが、教室などでは相当に態度がでかかったように思う。先生たちも苦々しく思っていたに違いなく、今となっては冷や汗ものである。

それが、やはり卒論生として研究室に所属するようになる頃には、指導教授の数メートル以内に近付くだけで、自然と姿勢が「気をつけ！」になるほど謙虚になっていた。社会のヒエラルキーの一番下にいるという自覚がそうさせたのだと思う。そして、大学院で5年を過ごし、博士論文を提出する頃になると、一瞬できていた筈の自信すらどこかに消えてしまい、見た目はともかく、気持ちの上では人生で一番謙虚に

なっていた。

そんな時に、「気をつけ！」でしか近寄れなかった指導教授から、随分気楽な雰囲気
で声をかけられた。

「松村君、『博士論文をかく』の『かく』というのは、どういう字を書くか知っている？」

と問われたのである。質問の意図をはかりかねながらも

「それは先生、『書く』ではないですか。」

と答えると、すかさず先生は

「違うよ。『恥を搔く』の『搔く』ですよ。」

と微笑まれた。

「博士論文なんていうのはねえ、本当に恥ずかしいものですよ。僕もそうでした。だから『恥を搔く』の『搔く』なんですよ。」

感動した。そして、この時「恩師」という二文字が私の頭に浮かんだ。あまりにも謙虚に縮こまってしまうがちな論文提出前の学生に、本来ののびやかさを取り戻させようという親心。私はそれを感じて、心動かされたのだ。

自由であること

それから1年半ほど経った時のこと。恩師は定年退官され、その後に私が専任講師に採用された。「これは責任重大」などと思いつつ、まずは、先生にご報告に上がった。ことの経緯を写真差替え、了解しました。ご説明したところ、先生は次のように声をかけて下さった。

「松村君、それはご苦労様。これからは一に体力、二に体力、三四がなくて五に体力だからね。」

「えっ？先生、知力は要らないのですか？」

「それは大分後の方だね。」

こんなやり取りの後、先生はこう私に尋ねられた。

「ところで松村君、辞めたら何するかはもう考えた？」

「いいえ、先生。今採用して頂いたところですので、『辞めたら何するか』は全く考えておりませんが？」

「それはいけませんね。『辞めたらあれをやってやろう』と楽しみにしているくらいでないと、組織の中で言いたいことが言えなくなるじゃないですか。」

定年まで30年近くにわたって勤められた恩師の忠告は、私の経験で知り得る範囲を遥かに超え、人生における「自由」の価値を改めて考えさせて下さる、とても有り難いものであった。そう、たった一度の人生、一つの組織の中で縮こまって生きる必要はないのだ。決められた組織内の責任分担に応えるのに汲々とするくらいなら、そこを飛び出て自由になっても良い。そう思うと、随分と気楽になったのを昨日のこの

ように思い出す。

あれから 30 年。還暦を迎える直前に私は大病を患った。幸い、2 か月程の入院と自宅療養期間を経て何とか元に近い状態で職場復帰できた。その直後に恩師ご夫妻を囲む新年会があった。その時に奥様から声を掛けられた。

「松村さん、仮にうちの主人に敬意を抱いて頂けるのなら、どうか卒寿を超えても元気に過ごしているところを見習って下さいね。」と。

こちらが還暦を過ぎても恩師は恩師。その教えは尽きることがない。人生の中で良い師に出会えること。それを楽しみにしていれば、きっと幸運が巡ってくるように思う。

東京大学大学院工学系研究科 教授